

V 研究の実際

1 情報モラル教育研究班の取組

本研究班では、情報モラルにおける実態調査、「G I G Aワークブックみやざき」の活用について研究を行った。

(1) 情報モラルにおける実態調査

① ねらいと内容

町内の児童生徒の情報モラルにおける実態や課題を把握するために、町内小学5・6年生及び中学生を対象にアンケート調査を実施した。そのアンケート結果を考察し、町内の教職員へ発信・周知を行った。

② 調査結果（対象 小学5・6年生…222人、中学生…323人）

設問	質問内容			ある	ない
1	メールやLINE、SNS、オンラインゲームなどで、友達や知り合いから悪口や傷つく言葉を <u>言われた</u> ことがある。			13%	87%
2	メールやLINE、SNS、オンラインゲームなどで、友達や知り合いに悪口や傷つく言葉を <u>言ってしまった</u> ことがある。			9%	91%
3	SNSやオンラインゲームなどで、知らない人から悪口や傷つく言葉を <u>言われた</u> ことがある。			13%	87%
4	SNSやオンラインゲームなどで、知らない人に悪口や傷つく言葉を <u>言ってしまった</u> ことがある。			4%	96%
5	メールやLINE、SNS、オンラインゲームなどで仲間はずれにされたことがある。			7%	93%
6	インターネットゲームなどで、お金のかかるアイテムなどを買ったことがある。			32%	68%
	6の質問で「ある」と回答した児童生徒の内、1万円以上の課金経験がある児童生徒の人数			42人	
7	平日、インターネット（メールやLINE、SNS、オンラインゲーム、動画・音楽視聴）を1日にどれくらい使っていますか。	使わない	1時間未満	1～2時間	2時間以上
		10%	13%	38%	39%
8	あなたの家庭では、インターネットやゲームの使用時間のきまりがありますか。			51%	49%
9	インターネットで、実際に会ったことがない人と連絡を取ったことがありますか。			22%	78%
10	インターネット上に自分の名前や住所、学校名を書き込んだり、顔の写った写真を載せたりしたことがありますか。			11%	89%

③ 考察

調査結果1～5より、インターネット上のコミュニケーションによるトラブルが各項目10%前後が「ある」と回答している。小学校高学年や中学生はスマートフォンやタブレットPCに触れる機会や時間の増加によりコミュニケーションにおけるトラブルも多く起きていると考えられる。

調査結果6より、課金の経験がある児童生徒が3人に1人で、そのうち、1万円以上の課金をしたことがある児童生徒が42人おり、金銭感覚の問題や保護者への同意

のない課金などが懸念される。

調査結果 8 より、家庭でのきまりがない児童生徒が約半数いる。きまりがないことにより、ネットゲームへの過課金や長時間使用につながっている可能性が懸念される。

調査結果 9、10 より、インターネットを利用した出会いや個人情報漏洩につながるインターネット利用もみられる。

(2)「GIGAワークブックみやざき」の活用

① ねらい

情報モラル教育を教育活動の中で効果的に実施していくために、町内の教職員の誰もが情報モラル教育についての授業をできるようにすることが重要であるが、教職員が抱えている情報モラル指導への不安や授業準備の負担などを軽減する必要がある。そこで、「活用型情報モラル教材 GIGAワークブックみやざき」(令和 5 年度 宮崎県教育委員会)の活用の在り方について研究を行った。また、本教材を町研究センターだよりを通じて、町内の教職員への周知を図った。

② 「GIGAワークブックみやざき」の内容

ア 「GIGAワークブックみやざき」とは

本教材は、ネットの特性や適切なコミュニケーション方法、情報のリスクなど、情報モラルについて学ぶことができる教材である。また、情報や ICT を上手に活用し、情報社会に参画して社会に働きかけるための情報活用についても学ぶことができる教材でもある。



【GIGAワークブックみやざき (小学校下学年版)】

イ 「GIGAワークブックみやざき」の3つの特色

「GIGAワークブックみやざき」には、後の3つの特色がある。

【特色１】 「情報活用」と「情報モラル」をセットで学ぶことができる。

本教材は、リスクに対応する力の育成だけでなく、上手に使いこなす力を含めた「情報活用」の力の育成もねらうことができる。

【特色２】 活動時間によって、柔軟に活用できる。

本教材は、学級活動や総合的な学習の時間での４５分や５０分の授業だけではなく、各教科等との関連や隙間時間を活用して１５分で実施できるものもある。

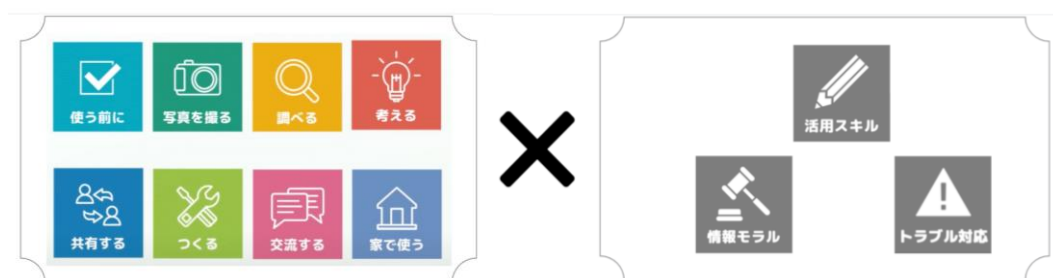
【特色３】 自覚を促し、リスクを見積もる力を育むことができる。

本教材は、カード分類比較法を用いている教材が多く含まれている。カード分類比較法とは、自分と他者の感じ方のズレをカード教材を通して考えさせ、議論させることにより、子どもたちにトラブルを自分のこととして意識させることができる教材を用いた指導法である。

ウ 本教材の構成

本教材は、次の【イメージ図】のように、８つのＩＣＴ活用場面「使う前に」「写真を撮る」「調べる」「考える」「共有する」「つくる」「交流する」「家で使う」を、『情報モラル』『活用スキル』『トラブル対応』の情報モラル教育の３つの視点に分けて構成されている。下の【具体例】のように、教科の特性や学級の実態に応じて、必要な内容を取り扱うことが可能となっている。

【イメージ図】






【具体例】

使う前に	活用スキル	たんまつかことばし まつを使うときの言葉を知ろう	写真を撮る	情報モラル	かって 勝手にってよいのかな
共有する	トラブル対応	へんじ 返事がないときは	家で使う	情報モラル	がくしゃうもく 「学習の目てき」と言えるのかな
つくる	活用スキル	上手なデザインの方法を学ぼう	考える	トラブル対応	データ データをすべて信じてよいのかな
写真を撮る	情報モラル	どこまで写真を公開してもよいのかな	調べる	トラブル対応	どこまでが広告なのかな？
考える	活用スキル	アンケートの質問項目をつくろう	共有する	情報モラル	批判と非難はどう違う？

エ GIGAワークブックみやざきの年間指導計画

GIGAワークブックみやざきをどの学年でどのような内容を指導すればよいかの年間指導計画例が、開発元である「LINEみらい財団」から令和５年６月に示された。この指導計画は授業の１５分版と４５分版（５０分版）について、活用できる学年や時期、教科、単元名等が記載されている。この年間指導計画例を参考に、本教材を活用した情報モラル指導を行った。

	4月	5月	6月	7月
15分版 各教科での活用	<div>生活  情報モラル P20</div> <div>みんなと仲良く</div> <div>道徳  活用スキル P12</div> <div>学校がはじまります</div>	<div>道徳  交通する P77</div> <div>礼儀（嫌な気持ちになったら）</div>	<div>生活  写真を撮る P35</div> <div>植物を育てよう</div> <div>国語  共有する P61</div> <div>聞いて伝えよう</div>	<div>国語  つくる P69</div> <div>絵日記を書こう</div>
45分版 学級活動 総合	<div>学活  活用スキル P10</div> <div>ICTでゆたかになる社会</div> <div>学活  情報モラル P15</div> <div>学校がはじまります</div>	<div>学活  使う前に P27</div> <div>端末配布</div>		<div>学活  家で使う P83</div> <div>端末持ち帰り</div>

【「GIGAワークブック」の年間指導計画例】

(3) 「GIGAワークブックみやざき」を活用した検証授業

「GIGAワークブックみやざき」を活用した授業を小学校第6学年と中学校第1学年で実施し、成果と課題を検証した。

① 検証授業Ⅰ ～小学校第6学年 学級活動～ 【情報モラル】

ア ねらい

インターネット上の情報を読むときに気を付けることを理解し、情報の真偽を見分けることができるようにする。

イ 教材

情報の信頼性（「GIGAワークブックみやざき 小学校高学年版」 48ページ）

ウ 事前の指導

活動及び内容	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> ○ 個人情報の真偽に関するアンケート調査を行う。 ○ ある4つのインターネット上に挙げられた「情報」について信頼できるか考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ アンケートを採ることで本時学習への意識付けを図る。 ○ 保護者と一緒に考えることで、家庭全体で課題を共有できるようにする。

エ 学習指導過程

学習活動及び学習内容	指導上の留意点
1 アンケート調査の結果を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学級全体のアンケート結果を確認することで、自分や学級の課題に気づかせ、本時学習のめあてにつなげられるようにする。

<p>2 嘘の情報を鵜呑みにしてしまった場合や嘘の情報を他の人に発信してしまった場合の危険について考える。</p> <p>○ 自分や周りの人の生活に悪影響を及ぼす。</p> <p>○ 対人関係のトラブルが起こる。</p> <p>○ 命に関わるトラブルが起こる。</p> <p>3 本時のめあてを確認する。</p>	<p>○ デジタルの特性を理解させることで嘘の情報の危険について気づかせる。</p>
<p>ネット上の「情報」が正しいか、どのように見分けることができるだろうか。</p>	
<p>4 ある4つのインターネット上にあげられた「情報」について信頼できるか友達と考えを比較する。</p> <div data-bbox="258 770 770 1037"> </div> <p>5 正しい情報かを見分けるための方法について考える。</p> <p>○ 様々なメディアの情報を調べる。</p> <p>○ 発信源が正しいかを調べる。</p> <p>○ 情報が最新のものか確かめる。</p> <p>6 本時の学習を振り返る。</p>	<p>○ 友達との比較を通して、捉え方の違いに気づかせるとともに、意見交流を通して考えを深めさせる。</p> <p>○ 正しい情報を見分けるための方法を理解することで、正しい情報かどうかを自分で判断できるようにする。</p>
<p>情報源が正しいか、最新のものかを確認し、様々なメディアから「情報」が正しいかを見分ける。</p>	
<p>7 これからの行動目標を立てる。</p>	<p>○ 目標を設定することで、情報を正しく見分けようとする意欲をもたせる</p>

オ 検証授業Ⅰの成果と課題

- 15分版の教材を45分の授業の中で用いることで、本時のねらいに向けた活動を充実させることができた。
- 4つの事例を信頼度の高い順に順位づけする活動を取り入れたことで、意見交流が活発となり、児童が主体的に学習に取り組むことができた。
- SNSで情報を収集することについて、デメリット中心の学習内容であった。メリットにも着目し、情報を上手に活用する力の育成も図っていく必要がある。

② 検証授業Ⅱ ～中学校第1学年 道徳～ 【情報モラル】

ア ねらい

- コミュニケーションにおける自分と他者との受け取り方の「違い」に気づく。
- ネットの特性を踏まえ、危険を回避しながら、自分の考えや気持ちを相手に伝える方

法について考える。

イ 資料

こんなつもりじゃなかったのに

(「GIGAワークブックみやざき 中学校・高等学校版」 15 ページ)

ウ 学習指導過程

学習活動及び学習内容	指導上の留意点
<p>1 今までの SNS での経験を振り返る。 過去に SNS で嫌な思いをしたことがあれば、共有する。</p> <p>2 5つのトークを見て、自分、もしくはトークを見た人がどんな気持ちになるのかを考える。</p>	<p>○ だれもいなかった場合、2つのトーク画面の例を見せ、受け取り方の違いについて考えさせる。</p> <p>○ 自分が「はれ」、「あめ」、「かみなり」に分類したものについて、根拠となる部分に○を付け、理由を書かせる。</p>
	
<p>3 グループで意見を共有する。</p> <p>4 全体で意見を共有する。</p> <p>5 「こんなつもりじゃなかったのに」とならないための方法を考え、全体で意見を共有する。</p>	<p>○ 自分と他者との受け取り方の「違い」に気づかせるため、自分と意見が異なるトークに注目させる。</p> <p>○ 意見が偏らないように、それぞれの立場からの考えを取り上げる。</p> <p>○ ネットの特性を踏まえ、トラブルを回避する方法を5つのトークを基に考えさせる。</p>

エ 検証授業Ⅱの成果と課題

- 様々な視点から思考することができたため、多角的な意見が生徒から出された。
- 返信を行う時間やグループのサイズ(人数)など、様々な状況や視点から思考することができたため、多面的にリスクを見積もることができた。
- ねらいにより迫るためには、どのように返信したらよいかという視点で授業のまとめを行う必要があった。

③ 検証授業Ⅰ・Ⅱを通しての考察

前述の「GIGAワークブックみやざき」の3つの特色について、検証授業Ⅰ・Ⅱを通して、次のように考察した。

- これまでの情報モラル教育では、多岐にわたる情報通信手段をカバーした教材はほとんどなく、「個人情報を出さない」「SNSで誹謗中傷をしない」といった一般的な指導をするにとどまっていた。本教材を活用した授業の検証を通して、具体的なSNSでのやり取りを例に出し、問題点を考えることで、ネットの特性や適切なコミュニケーション方法、情報のリスクなどを学ぶことができ、本教材の【特色1】が指導に有効であると言える。
- 検証授業Ⅰでは15分版の教材を45分の授業の一部として活用した。また、どの媒体から情報を得たのかということに加え、誰がその情報を得たのかという要素を追加し、4つの事例について信頼度の高い順に順位づけをさせた。様々な要素を丁寧に吟味することで目標を達成することができ、本教材の【特色2】が指導に有効であると言える。
- 検証授業Ⅱでは、生徒が「メッセージを送った時間」や「絵文字の意味」など、様々な視点で意見を述べた。客観的に考えることで、幅広い視野をもつことができ、それを自分自身のSNSの扱い方に生かすことができ、本教材の【特色3】で示したカード分類指導法は有効であると言える。

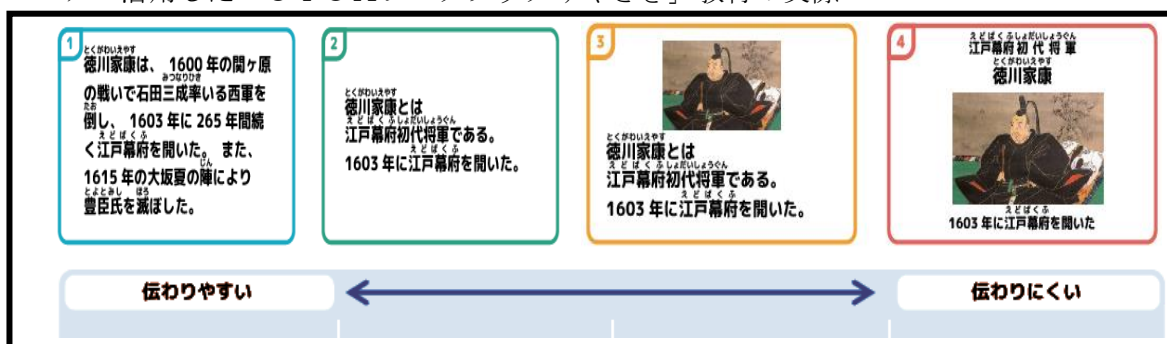
検証授業Ⅰの後、ある児童がネットニュースの情報を鵜呑みにして話をしている場面があった。その時に、他の児童が「その情報の情報源はどこか。」と問い返す様子が見られた。日常生活においても、児童同士が授業の内容を再度振り返ることで、さらに情報の真偽を確認することの大切さについて学びを深めることができたようである。このように、生活指導・生徒指導や、各教科の内容と関連させながら指導を行っていくことで自律的な行動のできる児童生徒を育成できると考える。一方で、検証授業Ⅰでは、情報の真偽を見分けることをねらいとしたため、SNSの速報性というメリットに触れる事ができなかった。これからの情報モラル教育はインターネットの使用抑制ではなく、活用を前提としてICTを上手に活用していく力の育成を行っていく必要がある。そのため、SNSのメリット・デメリットを理解したうえで、目的や状況に合わせて本やインターネット、テレビ等の複数の選択肢の中から最適なもの・方法を考えられる力の育成を目指して、本教材の活用の在り方について考えていく必要がある。

(4)「GIGAワークブックみやざき」活用実践事例

検証授業後の協議を踏まえ、各研究員で本教材の活用実践を更に行い、実践事例として町内の教職員へ発信・周知した。

- ① 活用実践事例Ⅰ～小学校第6学年 総合的な学習の時間～【15分実施・情報活用】
修学旅行のまとめを児童に作成させる事前指導として、どのように資料を作成すればよいのか、また、相手に伝わりやすいプレゼンテーションにするためにどうすればよいのかを児童に考えさせた。

ア 活用した「GIGAワークブックみやざき」教材の実際



イ 学習の流れ

「上手なデザインの方法を学ぼう」～小学校第6学年 総合的な学習の時間～ ワークブック 【教材】 小学校上学年版 p. 73 【指導書】 小学校上学年版 p. 22	
本時の目標	・ 聞き手に分かりやすいスライドの工夫について考え、スライド資料を作成することができる。
学習内容及び学習活動	指導上の留意点
1 プレゼンテーションのスライドから本時の課題を設定する。 「聞き手に伝わりやすいスライドにするにはどうしたらよいのだろうか」	見やすい資料を作成するためのポイントは何かを考えさせる。
2 4つのプレゼンテーションのスライドを見比べて、伝わりやすい順に並び替え、友だちと意見交流をする。	4つのスライドを提示し、発表内容が伝わりやすいものの順に並び替えさせる。
3 伝わりやすいスライドを作成するため、見やすい資料を作る際のポイントを考える。	たくさんの情報を書くよりも、重要な情報を選んで短い言葉で伝えたり、絵やイラストを入れたりすることで、相手に伝わりやすくなることに気づかせる。
4 児童が実際に作成しているスライドを見直して、伝わりやすいポイントをおさえられているか確認し、訂正する。	「伝わりやすい」と感じたスライドを参考に、自分が作成したスライドを見直し、訂正させる。

今回の授業実践を通して、次のような効果がみられた。

- 「言葉の精選」「文末表現」「文字や画像の配置」「写真やイラストの活用」等、スライドを作成する際のポイントをおさえることで、よりよいプレゼンテーションの構成の在り方を考えることができた。
- 実際の4つのスライドを見比べたことで、スライドの作成のポイントを確認することができた。
- 見やすい・分かりやすいプレゼンテーションにするにはどうすればよいのかを、他者と意見交換をすることで、よりよいスライドの作成につなげることができた。

② 活用実践事例Ⅱ～中学校第2学年 行前活動～【15分実施・情報活用】

修学旅行の班別自主研修等で、資料作成のために写真を撮る際、どのような撮影の仕方がよいのかを生徒同士で意見交流をしながら考えさせた。今回は、「GIGAワークブックみやざき 小学校上学年版」を中学生の実態に合わせて一部変更しながら活用した。

ア 活用した「GIGAワークブックみやざき」の教材の実際

1
 同じところから
撮る

2
 いろいろな角度から
撮る

3
 近づいて大きく
撮る

4
 遠くから全体を
撮る

やりたいこと	意識すべきこと
例) 委員会活動で、前に比べて花だんがきれいになったことを伝えたい。	①同じところから撮る、④遠くから全体を撮る
A: 理科の授業で、アサガオの成長を5日間、毎朝記録したい	
B: 体育の授業で、2人がとび箱をとぶ様子を比較して見せたい	
C: 体育の授業で、得意な人がとび箱をとぶ様子をいろいろと分析したい	
D: 社会の授業で、自動車工場の生産ライン全体を紹介したい	

イ 学習の流れ

「どのように写真を撮ればいいのか」～中学校第2学年 行前活動～ ワークブック【教材】小学校上学年版 pp. 37～38【指導書】小学校上学年版 p. 14	
学習内容及び学習活動	指導上の留意点
1 修学旅行のまとめをする際、個人が撮影した写真を用いることを伝える。 「相手に伝わるような写真にするにはどうすればよいのだろうか」	【教材】p. 37 のワークシートを配布し、写真の撮影の仕方が複数あることをおさえる。
2 A～Dの場面において、どのように写真を撮影すればよいのかを考え、友だちと意見交流をする。	A～Dの4つの場面と写真の撮り方を提示し、それぞれの場面において、どのような写真の撮り方をすれば適切かを考えさせる。
3 写真を撮影する際の考慮すべき点を考える。	写真を活用する目的が異なると、写真の撮影方法も変わってくることに気づかせる。

今回の授業実践を通して、次のような効果がみられた。

- 小学校上学年版を中学校用に活用することで、生徒の実態に合わせることができた。
- 生徒にとって身近である「写真撮影」を題材とすることで、写真を撮影する際の注意点を考えたり、情報モラルを自分事として考えたりすることができた。

③ 活用実践事例Ⅲ～小学校第5学年 総合的な学習の時間～【45分実施・情報モラル】

日常生活で使う言葉を例に挙げ、自分と他者との間で感じ方の違いがあることに気づかせることで、SNS等で発言する際どのような点に気をつければよいかを児童に考えさせた。

ア 活用した「GIGAワークブックみやざき」の教材の実際

1 あなたが、クラスの友だちから言われて「いやだな」と感じる言葉を一つ選んでみましょう。

1 まじめだね	2 おとなしいね	3 いっしょうけんめいだね	4 こせいで個性だね	5 マイペースだね
1 すぐに返信が来ない	2 なかなか会話が終わらない	3 知らないところで自分の話題が出ている	4 話をしているときにケータイ・スマホをさわっている	5 自分が一緒に写っている写真を公開される

いやだ ←————→ いやではない

イ 学習の流れ

「自分と相手とのちがひ」～小学校第5学年 総合的な学習の時間～ ワークブック【教材】小学校上学年版 p. 14～16【指導書】小学校上学年版 p. 6	
本時の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 同じ言葉でも、人によって感じ方が違う言葉があることに気づく。 ・ 文字だけで伝えると感情が伝わらないので、誤解されやすいことに気づく。

学習内容及び学習活動	指導上の留意点
1 ある5つの言葉から、クラスの人から言われて「いやだな」と思う言葉を1つ選び、グループで意見を交流する。	「まじめだね」「おとなしいね」等5つの言葉を提示し、いやだなと思う言葉を理由と合わせて選び、その理由を話し合わせることで、自分と他者と言葉の感じ方に違いがあることに気づかせる。
2 ある5つの場面から、SNS等でクラスの友だちからされて「いやだな」と思う順に並び替え、その理由をグループで伝え合う。	「すぐに返信が来ない」「知らないところで自分の話題が出ている」といったSNS等のやりとりで起こりそうな5つの場面を提示し、自分が嫌だなと感じる順に、5つのカードを並び替えさせる。その際、一番嫌だと感じたカードや嫌ではないと感じたカードの理由を話し合わせることで、自分と他者の感じ方の違いに気づかせる。
3 自分と他者とで、言葉の感じ方に「ちがひ」があることに気づき、実際のSNS等のやりとりで起こりそうなトラブルを考える。	
4 自分と他者が気持ちよく、SNS等でやりとりをするにはどうすればよいのかを考える。	自分と他者で感じ方が違うことを踏まえながら、自分の考えや気持ちを伝えるために、「伝え方」「言葉遣い」などを確認してから行動することを理解させる。

今回の授業実践を通して、次のような効果がみられた。

- 本教材の中にモデル指導案として45分の授業の流れが掲載されている。そのため、情報モラル教育の指導をほとんど行っていない教員でも授業ができた。
- 児童同士で意見交流をすることで、自分と相手の感じ方の違いを認識することができた。
- 実際に情報機器や端末を使い、起こりうるトラブルを予測させることで、情報モラル上の問題を自分事として考えることができた。
- 互いの感じ方の違いから起こりそうなSNS上のトラブルにつなげて考えることで、実生活に生かしていこうとする意識をもたせることができた。

検証授業と合わせて、更に「GIGAワークブックみやざき」の実践を重ねたことで、教材に出てくる事例が実生活において起こりうるトラブルやリスクなどを題材としており、どの題材においても、他者と意見交流をする場面が設けられていることから、互いの意見を交流して新たな考えが生まれたり、自分の考えに根拠をもったりすることができること等、児童生徒にとっても情報モラルに関することが、自分のこととして考えられることを再確認することができた。また、様々な活用場面において情報モラル教育の指導ができるようになっていること、15分程度の短い時間に参考資料として用いることで、45分や50分といった通常の授業の教材として用いたりすることができること等、教職員の指導に対する不安感や負担は軽減されることも再確認することができた。